

愛知県美術館の展示室では、次回展覧会の円山応挙展の準備で大忙し。「クリムト黄金の騎士をめぐる物語」展以上に会場設営（ディスプレイ）に一層力が入っています。日本画の展覧会の場合、基本的に作品はケース内展示となりますので、会場は作り付けのケースのほか、普段は美術館のバックヤードに収納されている移動式の展示ケースを出したり、また、レイアウトによっては仮設のケースを作って展示準備をします。仮設とは言ってもガラスや照明も入る本格的なものです。



今回の展示での見どころのひとつとなる大乘寺の障壁画の展示については、特にこだわった作り込みがされています。ここだけはガラスケースを作るのではなく、大乘寺の客殿を再現展示するものです。



畳が敷かれた様子が写真からわかるでしょうか？畳の縁の文様は、大乘寺で使われているものと同じものが調達されました。他にも釘隠しは大乘寺に使われているものをかたどりさせてもらって同じ文様のものを作っているそうです。





建付けが終わってからも木部の色を修正したりして、担当業者の人にもうんとこだわってもらっています。さて、この部分に重要文化財の襖絵が入るとどんなに見えるでしょうか？



現在実際の大乗寺では、作品保存上の観点から、本物の襖絵は収蔵庫にしまわれ、複製画が嵌められているということです。ですから愛知県美術館で実作品を見られるというこの展覧会は稀な機会となり

ます。しかもこの部分にはガラスがありませんし、照明についても特別に朝昼夕の自然光の変化を再現した照明となりますので、見逃せない展示となることでしょう。出来上がりを大いに期待していただき、ご来館ください。

(ST)